第34回 熊本大学附属図書館貴重資料展

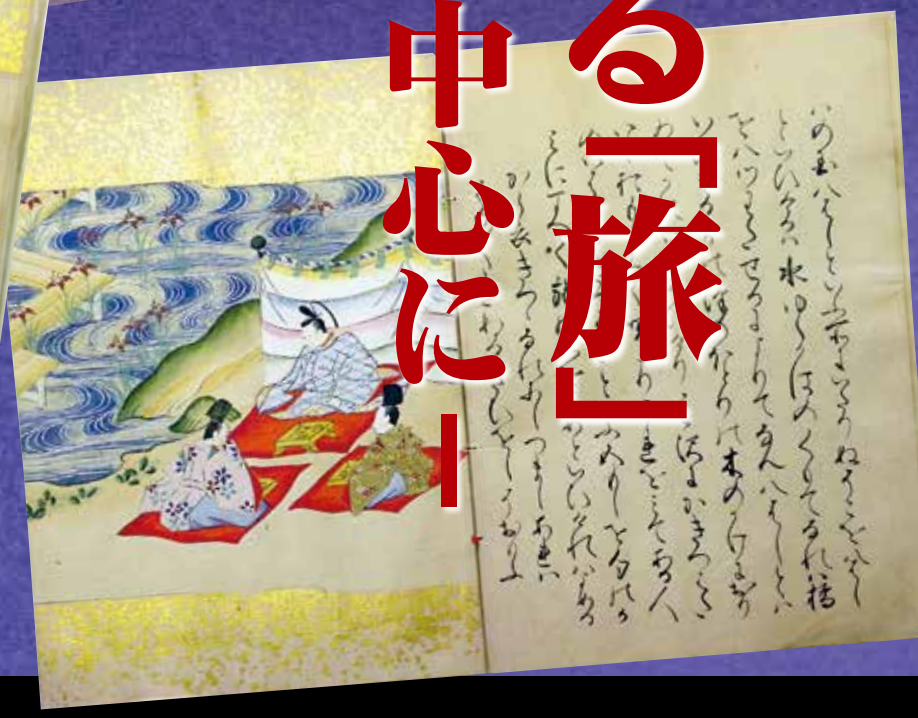
永青文庫本に見る「旅」
―細川幽斎文学書を中心に―

解説目録

期間　平成30年11月2日(金)～4日(日)
10時～17時

会場　熊本大学附属図書館 1階
古文書閲覧室・ラーニングコモンズ

古典文学における「旅」のイメージを追究する



主催　熊本大学附属図書館・熊本大学永青文庫研究センター
協力　公益財団法人永青文庫
後援　熊本県教育委員会・熊本市教育委員会・熊本日日新聞社・NHK 熊本放送局・RKK・TKU・KKT・KAB

フェスタ 国立大学2018

第34回 熊本大学附属図書館貴重資料展

永青文庫本に見る「旅」－細川幽斎文学書を中心に－ 解説

巻頭言

去る二〇一七年は、細川幽斎が九州に足を踏み入れてから四三〇年目に当たりました。天正十五(一五八七)年三月、豊後国大友氏と薩摩国島津氏との紛争を調停するため、豊臣秀吉は自ら九州に下向しました。当時、丹後国田辺城(京都府舞鶴市)に隠棲していた幽斎も、翌月に出発します。幽斎は、最南は大宰府まで下り、そして同年七月に帰坂しました。この三ヶ月の道中記が『九州道の記』であり、永青文庫には幽斎自筆本が残ります。本資料展は、幽斎が関係した書籍を中心に、古典文学における「旅」のイメージを紹介します。なお、紀行文の代表とされる芭蕉『奥の細道』は永青文庫に収められません。このように、収蔵される資料の種類にも、永青文庫の特徴が垣間見えます。

二〇一八年十月

熊本大学永青文庫研究センター　竹島一希

凡　例

一、本図録は、第34回熊本大学附属図書館貴重資料展「永青文庫本に見る－細川幽斎文学書を中心に－」(展示監修：竹島一希)【会期：平成30(2018)年11月2日～4日】開催にあたり作成したものである。

一、展示資料の書名は、通行のものに統一した。

一、本図録作成にあたり、細川幽斎に関して、井上宗雄『中世歌壇史の研究　室町後期　改訂新版』(明治書院・1991年)、森正人・鈴木元編『細川幽斎　戦塵の中の学芸』(笠間書院・2010年)を参照した。

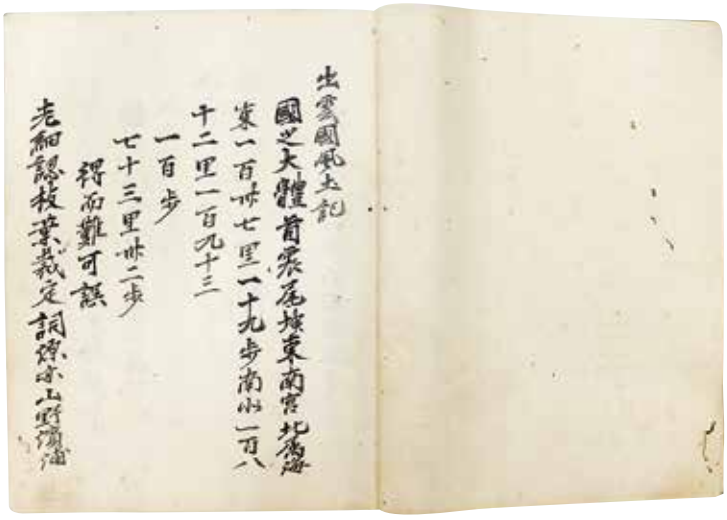
一、解説中に参考情報として示した翻刻や注釈は、永青文庫蔵の当該本を対象としたものを主とした。

一、掲載している写真は所蔵先の許可なく転載・複写することを認めない。

1 『出雲国風土記』(107.36.6.13)
『豊後国風土記』(107.36.6.14)

和銅六(七一三)年五月二日、「畿内七道諸国郡郷名、着好字。其郡内所生、銀銅彩色草木禽獣魚虫等物、具録色目、及土地沃堉、山川原野名号所由、又古老相伝旧聞異事、載于史籍言上(畿内と七道との諸国の郡・郷の名は、好き字を着けしむ。その郡の内に生れる、銀・銅・彩色・草・木・禽・獣・魚・虫等の物は、具さに色目を録し、土地の沃堉、山川原野の名号の所由、また、古老の相伝ふる旧聞・異事は、史籍に載して言上せしむ)」という官命が出された(続日本紀)。これを受けて諸国は、その国情を中央に報告した。その報告書が風土記である。『古事記』がこの前年に、『日本書紀』も七年後に編纂されることを思えば、ここには、諸国を詳細に把握し、国家としての規模を整えたい大和朝廷の意志が窺えよう。しかし、現存する風土記は、完本である『出雲国風土記』の他は、『播磨国風土記』、『豊後国風土記』、『肥前国風土記』、『常陸国風土記』はいずれも一部しか残っていない。

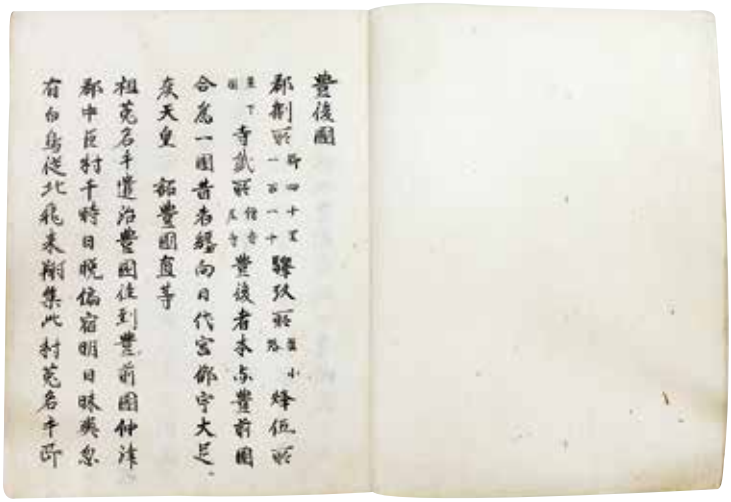
永青文庫本『出雲国風土記』は、奥書によれば、慶長二(一五九七)年十月十二日、細川幽斎が「江戸内府」(徳川家康)の本を書写したもの。本文の一部を脱落させる脱落本系統の一本であり、書写年紀のある写本の中では最も古い伝本である。佐方宗佐『御歌書目録』は、「これは、そのくにの山川、田地などのことをかき申たる物にて御ざ候。山川に、とり、魚、けだ物などの有なしなどまで書つけ申候。げんめいてんわう和どう五年にせんじたる物、又しやうむてんわうてんぴやう年中とも御ざ候。りやうせつ。きんちうに六十余州の在之由也」と述べ、「きんちう」(禁中)に諸国の風土記が存在すると指摘するが、現存するのは上記五カ国分のみである。植垣節也校注・訳『風土記』(新編日本古典全集5・一九九八年)に注釈が収められる。



『出雲国風土記』冒頭

『出雲国風土記』奥書

永青文庫本『豊後国風土記』の文禄三（一五九四）年四月五日付奥書は、幽斎自身が「或本」を書写、校合したと読めるが、佐方宗佐『御歌書目録』に「佐方宗佐筆／これも、いづものくにのふどきと同物にて御ざ候。かやうの物、六十六さつ御ざ候うちにて御ざ候」とあるように、本文は宗佐筆である。また、本書の親本である「或本」は、永仁五（一二九七）年書写の冷泉家時雨亭文庫本であり、幽斎が時の冷泉家当主冷泉為満から借用したことが指摘されている。さらに、幽斎は、翌年再び同書を借用し、それを家康に又貸ししたらしい（言経卿記・文禄四年十二月一日条、慶長二年六月一日条）。永青文庫本『出雲国風土記』と合わせて、当時幽斎や家康が風土記の収集に関心を持っていたことが窺える（後掲『歌枕名寄』解説参照）。池上洵一「永青文庫蔵「豊後国風土記」――影印と解説――」（『国語国文学研究』第5号）に影印と解題があり、本書と冷泉家時雨亭文庫本との関係については、藤本孝一「「豊後国風土記」解題」（『豊後国風土記　公卿補任』〈冷泉家時雨亭叢書第四十七巻・一九九五年〉）を参照。



『豊後国風土記』冒頭

『豊後国風土記』奥書

2 『土佐日記抄』（2.2.21.1～2）

紀貫之『土佐日記』は、日本文学史上最初の日記文学であり、仮名で書かれた紀行文である。承平四（九三四）年十二月二十一日に土佐国国庁を出発し、翌年二月十六日に京に到着するまでの道中記を中心とする。「おとこもすといふ日記といふものを、をんなもしてこゝろみんとてするなり」（『土佐日記抄』本文）の著名な冒頭から明らかなように、貫之一行に同行する女性の立場で記している。この虚構性が文学としての日記を誕生させたのである。

『土佐日記抄』は、北村季吟作の『土佐日記』注釈書。寛文元（一六六一）年七月十六日から八月十一日まで執筆作業、十二月二十二日から二十八日まで清書を行った（季吟日記）。近世初期における『土佐日記』の代表的な注釈書で、「土佐日記抄は、北村季吟法印の注釈にして、なべて世に土佐日記といへば、まづこの抄を見ることゝはなりぬ」（岸本由豆流・土佐日記考證）と世評も高かった。初版以後、数度再板される。本書は寛文元年八月吉日の刊記を持つが、実は版元名の「御書物屋／出雲寺和泉掾」のみ埋木した後印本。永青文庫本は表紙を新しくし、大和綴に綴じ方を改めている。『土佐日記抄』の成立については、野村貴次「『土佐日記抄』」（『北村季吟の人と仕事』〈新典社・一九七七年〉第二章第二節）他を参照。

『土佐日記抄』表紙

『土佐日記抄』本文冒頭

3 『伊勢物語』(216.1下阴一番)『伊勢物語』(216.17)『伊勢物語』(212.324.1～3)

日本文学史上、初めて書かれた紀行文は『土佐日記』であるが、後世に最も強い影響を与えた「紀行文」は『伊勢物語』であろう。在原業平作の和歌を中心とした『伊勢物語』は、数度の段階を経て、おおよそ平安前期から中期にかけて現在の形に編纂されたと考えられている。『伊勢物語』の中でも、業平が関東に下向する第七段から第十五段にかけて、そして特に、三河国八橋(愛知県知立市)、富士山、隅田川を辿る第九段は名高い。

『伊勢物語』(216.1下阴一番)は、全編細川幽斎筆と極められた『伊勢物語』。奥書は、天福本、流布本、武田本の奥書の後、「祖父卿(藤原定家)真筆本」を一字違わず写したという冷泉為相の奥書、さらにそれを東氏数に書写させたという応永二(一三九五)年三月の正徹の奥書、最後に正広の署名と花押が書かれる。

『伊勢物語』(216.17)は、箱書に「一条関白兼良公芳毫」とあり、一条兼良筆本であるとするが、筆跡を武井和人・木下美佳編『一条兼良自筆　伊勢物語愚見抄　影印・翻刻・研究』(笠間書院・二〇一一年)所収の兼良筆本と比較すれば、本書は兼良筆とは言い難い。本書の行間に細かく付注されるが、その内容が兼良『伊勢物語愚見抄』ではなく、『和歌知顕集』や『冷泉家流伊勢物語抄』といった鎌倉期に成立した注釈書(古注)と、肖柏『肖聞抄』や三条西家の注釈(旧注)との混在であることが指摘されている。『伊勢物語　伝一条兼良筆本』(勉誠社文庫・一九八二年)、『伊勢物語　大和物語』(細川家永青文庫叢刊第十巻・一九八四年)に影印が収められ、特に前者の片桐洋一氏による解説を参照。

『伊勢物語』(216.1下阴一番)第九段

『伊勢物語』(216.17)第九段

『伊勢物語』（212.324.1～3）は、署名、奥書等はないが、江戸前期から中期に活躍した奈良絵本、往来物の女流作家である居初つなの作である。つなは、近江国大津（滋賀県大津市）出身で、同じく往来物作家であった窪田やすを母とする。元禄期をその活躍の最盛期とするが、生没年は未詳。数多くの奈良絵本の作者と目されており、挿絵、本文の双方とも制作する技量を備えていた。以上は、石川透『奈良絵本・絵巻の展開』（三弥井書店・二〇〇九年）所収の諸論考を参照。

『伊勢物語』（212.324.1）第九段

『伊勢物語』（212.324.1）第九段

4 『源氏物語』須磨巻（丑上.1.12）『源氏物語』明石巻（216.3.13 戌十）

『伊勢物語』の在原業平が東国へ行くことを反転したように、『源氏物語』の光源氏は摂津国須磨（兵庫県神戸市）、播磨国明石（兵庫県明石市）へと流浪の旅に出る。『源氏物語』全巻は非常に大部であるが、永青文庫には数組の写本が残されている。今回は『源氏物語』（丑上.一）から須磨巻を、『源氏物語』（216.3　戌十）から明石巻を展示した。

『源氏物語』（丑上.一）は、総勢四十人近くの著名人が一巻毎に書写した寄合書の本。桐壺巻の近衛前久以下、細川幽斎は玉鬘巻、細川忠興は花宴巻を写している。掲出の須磨巻は、里村昌叱の写。昌叱は室町後期から江戸初期にかけての連歌師で、紹巴に学んだ。末尾に「慶長四　五　十五一校了／一校了」とあり、昌叱が写した後、慶長四（一五九九）年五月十五日、さらにその後にもう一度校合作業がなされたことが知られる。徳岡涼「熊本大学附属図書館寄託　永青文庫蔵『源氏物語』寄合」（「国語国文学研究」第37号）を参照。

『源氏物語』（216.3　戌十）は、若菜下巻のみ山崎宗鑑の手になり、それ以外の全巻が細川幽斎筆。物語本文の行間に、『河海抄』、『紫明抄』の古注から『弄花抄』などの当代説までを幅広く書き付けている。本書に関しては、本田義彦「幽斎公筆源氏物語の研究 ― 桐壺 ―」（「国語国文学研究」第5号）、徳満澄雄「細川幽斎筆『光源氏物語聞書』について ― 弄花抄の成立事情についての考察 ―」（「国語と国文学」昭和45年7月号）、徳岡涼「伝細川幽斎筆『源氏物語』の書入れについて」（「国文学論集（上智大学）」第31号）、「細川幽斎はいかに源氏物語を読んだか」（『細川幽斎　戦塵の中の学芸』）参照。

『源氏物語』須磨巻

『源氏物語』明石巻

5 『十六夜日記』（107.36.8.4）

歌道家である御子左流の当主藤原為家は、晩年になり、嫡男為氏よりも、側室である阿仏との子為相を愛した。建治元（一二七五）年に為家が死去すると、遺産である播磨国細川荘の相続をめぐって、為氏と為相とが対立するようになった。阿仏は、為相の正当性を主張するべく、鎌倉での裁判に臨むために東海道を下ることを決意する。その折の記録が『十六夜日記』で、大きく、京都から鎌倉への紀行文である前半（弘安二〈一二七九〉年十月十六日～二十九日）と、鎌倉での滞在記である後半（弘安二年十月～弘安三年秋）とに分かれる。

幽斎筆の本書奥書によれば、本書は「所雇兼如法師之筆（雇ふ所の兼如法師の筆）」で、幽斎が連歌師である猪苗代兼如に書写を依頼した、兼如自筆本である。兼如は紹巴に師事した連歌師。本書は流布本では最善本の一つとされるが、佐方宗佐『御歌書目録』に、「兼如筆／これは、あぶつのとうごくくだりの時のみちのきか。しかぐくおぼえ申さず候。もしそれにて御ざ候はゞ、あぶつと申候は四でうのつぼねと申候て、ためいゑのきやうの女中、めいよの歌人にて御ざ候。定家のよめ也」とあり、幽斎以来代々細川家に蔵されてきたことが推測される。

『いさよひの日記』（勉誠社文庫・一九八二年）、『随筆紀行文集』（細川家永青文庫叢刊第十二巻・一九八四年）に影印が、福田秀一校注「十六夜日記」（『中世日記紀行集』〈新日本古典文学大系51・一九九〇年〉）に翻刻が掲載される。先行研究については、『いさよひの日記』の江口正弘氏による解説を参照。

『十六夜日記』冒頭

『十六夜日記』奥書

6 『海道記』（107.36.2.10）

『海道記』は、貞応二（一二二三）年四月四日、京都白河の「侘士」が京都を出発し、十七日に鎌倉に到着、そして帰京するまでの紀行文である。永青文庫本の外題、内題に「鴨長明海道記」とあるように、古くは長明作と考えられていた。佐方宗佐『御歌書目録』にも、「これも、右に御ざ候、下がものちやうめい、とうごくくだりの道のきにて御ざ候」とあり、幽斎段階でも同様に考えられていたことが分かる。しかし、長明が建保四（一二一六）年に死去したと推定されることから、現代では長明作者説は否定されている。作者は未詳。

永青文庫本は、奥書によれば、慶長三（一五九八）年九月中旬、細川幽斎が「書生」に命じて書写、校合させたものである。諸本では二類に属し、尊経閣文庫本に次いで書写年代が古く、また尊経閣文庫本の欠落箇所を補うことのできる善本である。『随筆紀行文集』（細川家永青文庫叢刊第十二巻・一九八四年）に影印が、江口正弘『海道記の研究　本文篇　研究篇』（笠間書院・一九七九年）に翻刻が収められ、諸本については江口「諸本とその系統」（『海道記の研究　本文篇　研究篇』）を参照。

『海道記』冒頭

『海道記』奥書

7 『歌枕名寄』（107.36.8.1.1～15）

澄月（未詳）撰の名所和歌集。正安三（一三〇一）年に編纂された『新後撰和歌集』以前の成立。勅撰集をはじめとする諸書より名所和歌を抜き出し、五畿七道に分ける。名所和歌集の中でも最大のもので、永青文庫本では六〇四三首を収める。三十八巻から成る永青文庫本は、全巻を備える諸本の中では最も原撰本に近い、非流布本系の最善本である。

奥書によれば、文禄三（一五九四）年七月、細川幽斎は、「年来所望」していた本書の書写を、「三条羽林（三条西実条）が丹後国に下るのに合わせて申請し、同地で書写校合した。それに先立つ五月二十八日付の、幽斎から実条宛の書状に「於内々申候大名寄歌枕写申度候（内々に申し候ふ大名寄歌枕写し申したく候ふ）」とあり（藤平春男編『中世歌書集』〈早稲田大学蔵資料影印叢書国書篇第七巻・一九八七年〉）、幽斎にとっては文字通り「年来所望」であったようだ。佐方宗佐『御歌書目録』には、「内六―八　幽斎御筆／これは、にほんのめいしよのうたをあつめたる物にて御ざ候」とあり、三十八巻15冊のうち、第3冊にあたる巻六から巻八を収める一冊が幽斎の筆になる。本書書写から五年後の慶長四（一五九九）年八月六日、「内相府」（徳川家康）の「御分国々之歌枕可書進之由（御分国々の歌枕、書きて進ずべきの由）」の命令に従って、丹後国田辺において、幽斎が「大名寄」の抄出を中心に一書を編纂している（藤孝事記）。本書は渋谷虎雄『校本歌枕名寄　本文篇』（桜楓社・一九七七年）に翻刻が収められ、同『校本歌枕名寄　研究索引篇』（桜楓社・一九七九年）、樋口百合子『歌枕名寄』伝本の研究　研究編　資料編』（和泉書院・二〇一三年）に研究が備わる。

『歌枕名寄』巻三十六（第14冊）肥後国

『歌枕名寄』（第15冊）奥書

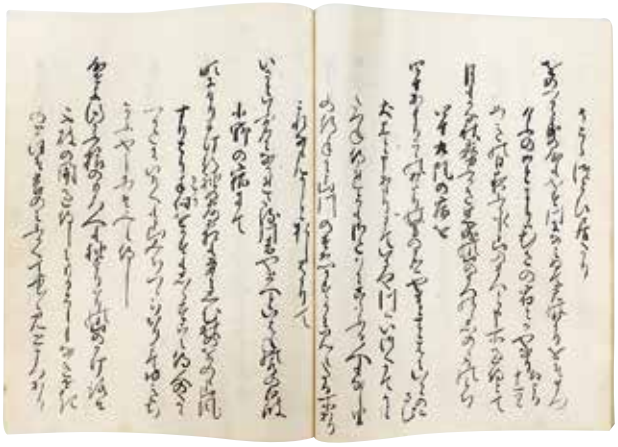
8 『富士紀行』『覧富士記』（107.36.8.3）

永享四（一四三二）年九月、室町幕府第六代将軍足利義教は富士山遊覧を計画する。同十日、京都を出発し、二十七日に帰京した。この遊覧の真の目的は、鎌倉府、及び第四代鎌倉公方足利持氏に対する牽制であったとされる。義教に随行した飛鳥井雅世、堯孝の道中記が本書である。本書奥書に「幽斎玄旨（花押）」、佐方宗佐『御歌書目録』に「あすかい殿両人の歌。ぎやうこう和歌所奉行もちたる人也。／別のこと御ざなく候」とあることから、本書の書写に細川幽斎が関与したことは間違いない。

内容は飛鳥井雅世『富士紀行』と堯孝『覧富士記』。両名とも当時の歌壇の重鎮である。『覧富士記』の奥書には、十月三日に義教から紀行文の提出を命じられ、四日に持参したことが記される。『富士紀行』の成立にも同様の背景を考えて良い。永青文庫本は冷泉家時雨亭文庫本に次いで書写年代が古い。この富士山遊覧の記録には、他に『富士御覧記』、『左大臣義教公富士御覧記』も残るが、これらからは義教自身が和歌を度々詠じていることが窺える。彼にとって、道中の歌枕などで和歌を詠み、雅世や堯孝といった名人の和歌を聞くことが楽しみであったのだろう。なお、この紀行の翌年、雅世は勅撰和歌集の撰者の命を受け、和歌所の開闔（出納係）に堯孝を任命した。これが、永享十一（一四三九）年に成立した、最後の勅撰集『新続古今集』である。

『覧富士記』は稲田利徳氏によって注釈が付されている（『中世日記紀行集』〈新編日本古典文学全集48・一九九四年〉）。『富士紀行』、『覧富士記』の諸本については、鈴木元「中世紀行詠　宋雅・雅世・堯孝」解題」（『百人一首　百人一首注　拾遺（三）』〈冷泉家時雨亭叢書第百巻・二〇一七年〉）を参照。

『富士紀行』不破関



『覧富士記』不破関1

『覧富士記』不破関2

9 『勅撰名所和歌抄出』（107.36.8.2.1～2）

連歌師の宗碩が編纂した名所和歌集。佐方宗佐『御歌書目録』にも、「これは、くに〳〵のめいしよをあつめて、歌をかきたる物にて御ざ候。そうせきといふ連歌しの作也」とある。「勅撰」の名の通り、勅撰和歌集より名所歌を抜き出したように見えるが、実は『勅撰名所和歌要抄』という類似の名所和歌集からの改編である。三条西実隆が記した永正三（一五〇六）年六月付の奥書には、「連歌用意」のために宗碩が編纂したことが述べられ、本書編纂の目的は連歌詠作に資するためであった。『実隆公記』永正三年六月四日条に「（宗碩が来て）勅撰名所部類上下奥書可染筆之由所望之間書之（勅撰名所部類上下の奥書、染筆すべきの由所望の間、之を書く）」、五日条に「染筆了」、六日条に「草本送恵之」と続けて記録されるが、六月四日、五日に書きつけた奥書が上記のもので、宗碩が草稿本を実隆に送付していることがわかる。

実隆の奥書の後に、藤孝（幽斎）の奥書があり、そこには本書の親本を「安東蔵人泰職」から借用したと述べられるが、安東泰職は未詳。

なお、本書については、渡辺守邦「勅撰名所和歌抄出の成立」（「大妻女子大学文学部紀要」第5号）、中島正二「『勅撰名所和歌要抄』並びに『勅撰名所和歌要抄抽書』の諸本について」（「三田国文」第16号）、松本麻子「内閣文庫本『勅撰名所和歌抄出』の解題と翻刻」（『連歌文芸の展開』〈風間書房・二〇一一年〉を参照。

『勅撰名所和歌抄出』冒頭

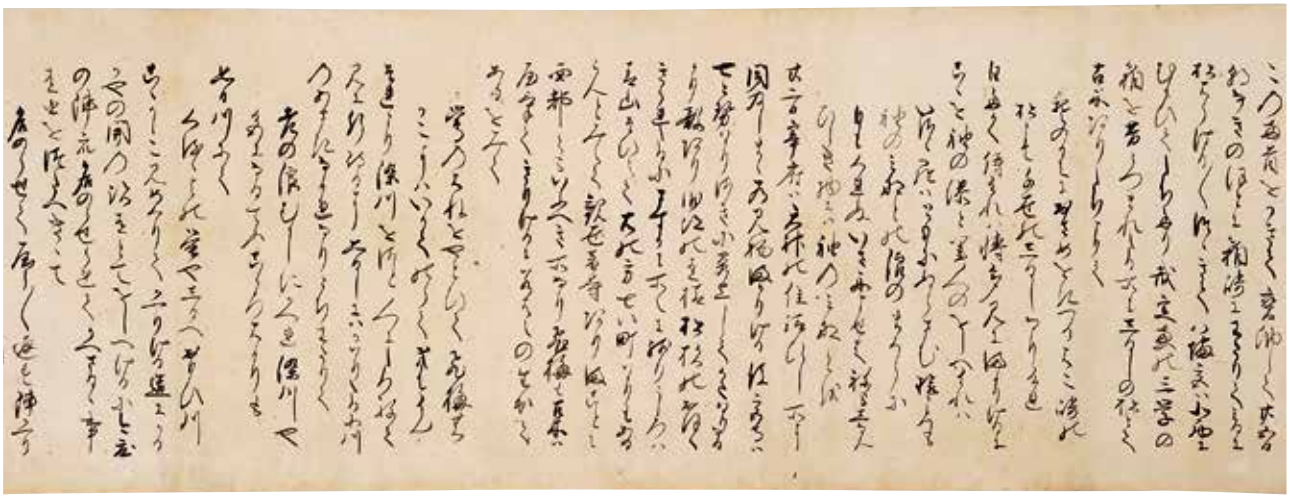
『勅撰名所和歌抄出』奥書

10 『九州道の記』（108.5.19）

天正十五（一五八七）年三月、「九州大友、嶋津わたくしの鉾楯をとゞめらるべきために」、豊臣秀吉は九州に向けて出立した。前々年に従一位関白内大臣となり、公武の最高位にあった秀吉は、自身の提示した講和勧告を拒否した島津氏を征伐することを決めたのである。細川幽斎嫡男の忠興は、肥後方面から攻撃する、秀吉を総大将とする部隊の四番隊をつとめるなど、既に秀吉と行動を共にしていた。一方幽斎は、隠居所である田辺城にいたものの、「いたづらに在国も空おそろしき心ちし」たので、四月二十一日に田辺城を出発し、秀吉の陣に趣こうとする。その後、日本海側を主に船で移動し、五月下旬に九州入り。五月二十六日の大宰府遊覧を最南とし、復路は瀬戸内海側を船で移動し、七月二十三日に大坂に到着した。この三ヶ月に渡る紀行文が『九州道の記』である。

本書は、筆跡より幽斎自筆本と目される最善本。伊藤敬校注・訳で『中世日記紀行集』（新編日本古典文学全集48・一九九四年）に収められ、鶴崎裕雄「細川幽斎の紀行――もう一つの紀行紹介への布石」（『細川幽斎　戦陣の中の学芸』）の研究が備わる。

『九州道の記』冒頭



『九州道の記』大宰府

11 『天正廿年玄旨詠草』（208.111）

本書は、細川幽斎の天正二十（一五九二）年正月から九月二十七日までの日次詠草である。幽斎筆。冒頭は「入唐御沙汰有し年／元日試筆／日本のひかりを見せて遥かなるもろこしまでも春やたつらん」であるが、詞書に「入唐御沙汰」とある通り、豊臣秀吉の「唐入り」（朝鮮出兵）にまつわる作である。この年の正月五日、秀吉は朝鮮出兵を諸大名に命じ、三月二十六日には京都を出立し、肥前国名護屋城（佐賀県唐津市）に向かった。幽斎も同時期に田辺城を出発したらしく、本書詞書からは、日本海側を辿って五月に名護屋城に到着したことが窺える。その後、六月十五日に、加藤清正が朝鮮出兵で不在の隙を突いて、島津家家臣梅北国兼が梅北一揆を起こす。一揆の事後処理のために派遣された幽斎は、七月に鹿児島入りし、本書所収の最後の作品「九月廿七日興行／わかでみんもみぢや春の桜嶋」に明らかなように、同日以降も鹿児島に滞在した。最終的に、翌年二月あたりに名護屋城に戻り、さらに九月十九日以前に関西に帰ったことが、『衆妙集』等の幽斎家集から判明する。

この天正二十年の紀行には、紀行文は残されていない。しかし、本書や幽斎家集の詞書に、その紀行を跡づけることができる。朝鮮出兵や鹿児島平定といった、常時と異なる環境にあっても、幽斎は変わらず文学を詠作していることが分かる。本書は、土田将雄『細川幽斎の研究』（笠間書院・一九七六年）に翻刻が収められ、鶴崎裕雄「天正二〇年（文禄元年）の細川幽斎 ― 豊臣政権下の文芸の一特徴 ―」（「国文研究（熊本県立大学）」第56号）に先行研究がある。

『天正廿年玄旨詠草』冒頭

『天正廿年玄旨詠草』鹿児島

12 『吾妻道の記』（108.5.9）

本書の箱書きに「幽斎公御筆／道之記」とあることから、細川幽斎の『九州道の記』、或いは内容によって幽斎『東国陣道の記』と誤解されやすいが、木下長嘯子『吾妻道の記』である。

長嘯子は、豊臣秀吉の北政所（ねね）の兄である木下家定男の勝俊。はじめは秀吉麾下の武将として活躍し、慶長五（一六〇〇）年の関ケ原合戦以降は隠棲し、歌道修行に専念した。『吾妻道の記』は、天正十八（一五九〇）年の後北条氏に対する秀吉の小田原征伐に従軍した際の道中記である。現存する中では、長嘯子の初めての散文作品である。なお、小田原征伐には幽斎も従い、上記『東国陣道の記』を残している。

本書に奥書等はないが、筆跡を見る限り、箱書の通り幽斎筆であると思われる。長嘯子は、実は若狭武田氏の元明と幽斎妹（三淵晴員女）との間に生まれたという説もあり（吉田幸一「木下勝俊の出自説についての問題点」〈吉田編『長嘯子新集　下巻　資料・論考』（古典文庫・一九九三年）〉）、それに従えば幽斎の甥に当たる。そうでなくとも、若い時分より幽斎に歌道の師礼をとったことが記録上確かである。本書は『吾妻道の記』諸本の中で、最も書写年代の古い最善本の地位にある。徳岡涼「永青文庫の典籍のこと」（「東光原」第43号）を参照。

『吾妻道の記』冒頭

13 『名所小鏡』(2.5.9)

江戸時代に入ると、庶民文学の主座は俳諧に移っていった。連歌と同様、俳諧を詠むためにも歌枕の知識は必要であるが、そのような要望に応えたのが『名所小鏡』である。

『名所小鏡』は、俳諧の辞書である『類船集』(延宝四〈一六七六〉年刊)の名所の部分を抜き出したもの。編者は未詳である。『類船集』は、いろは順の見出し語に、付合語(寄合語)を列挙し、見出し語に関わる和歌、漢詩、故事、物語などを示す。『名所小鏡』一冊で、当該名所に関する最低限の知識を得ることが目論まれている。『名所小鏡』は小本での刊行であったため懐中しやすく、数度の版行を重ね、広く流布した。

永青文庫本は、刊記に「貞享二乙丑年三月吉旦／洛陽二条通野田藤八開板」とある貞享二(一六八五)年版。本書扉に「鸞嘯」の朱印があり、熊本藩第六代藩主細川重賢の旧蔵本である。末尾に朱で「安永七年戊戌(一七七八)五月」の日付が書かれるが、これも重賢の筆跡である。本書全体に、朱の書き込みがあり、重賢が丁寧に目を通していたことが知られる。

『名所小鏡』本文冒頭

『名所小鏡』奥書

14 『肥後遊草』（106.5.15）

安永五（一七七六）年、阿波国勝浦郡小松島浦（徳島県小松島市）の船頭であった中島屋専助は、商売のため熊本を訪れた。本書はその折の紀行文、及び滞在記であるが、その内容はおよそ紀行文らしくない。専助は一船乗りでありながら、孝行者であり、また漢詩が江村北海編『日本詩選』に採られるなど、学問を好んだ人格者であった。

安永五年六月の「廿日ばかり」熊本に逗留した専助は、同年九月に本書を執筆している（自跋）。本書は三〇項から成るが、同じく自跋に「察学之有功於治（学の治に功有るを察す）」とあるように、他藩の藩主に学問の政治的効用を認識してもらうために書かれている。従って、当時の藩主であった細川重賢が行った一連の政治改革（宝暦の改革）の成果を列挙し、その傍らに四書五経や『孔子家語』といった「聖賢之語（聖賢の語）」（自跋）を掲げ、重賢の改革に儒教的な背景を認めようとする。

なお、本書はその後、『諸侯賢行録』に「肥後侯賢行録」の名で改作された上で収められ、写本として世上に流布した。これが重賢の明君イメージの形成に深く関わっていることが、小関悠一郎『〈明君〉の近世――学問・知識と藩政改革――』（吉川弘文館・二〇一二年）に説かれている。

『肥後遊草』冒頭

『肥後遊草』評定所

15 『やよひの旅』（4.2.65）『海辺の秋色』（4.2.87）『青葉の山路』（4.2.88）

この三書は、宇土支藩第五代藩主細川興里の正室であった清源院（軌子）の紀行文である。軌子は明君として知られた細川重賢の同母妹であり、また興里の弟である宇土支藩第六代興文も、重賢に倣った藩政改革を試みた藩主である。軌子の周辺には、特に好学の風が強かったと推測される。

延享二（一七四五）年正月、軌子は興里と婚姻を果たしたが、興里は同年十月に死去する。その後、軌子は義弟興文を養子とし、自身は清源院と称した。出生以来、江戸で暮らしていた清源院が、安永六（一七七七）年三月十三日から四月一日にかけて、「江の嶋へまふで序に」鎌倉、箱根などをめぐった紀行文が『やよひの旅』である。

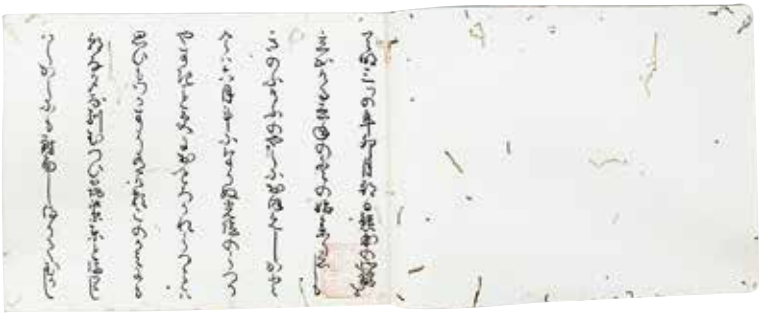
その後、肥後国への下向を「ひさしき御大望ながら、容易からざる事なれば、何かに延々なりしに」（綿考輯録・天明二〈一七八二〉年八月二十二日条）といった状況であったが、念願が叶い、「肥後国日奈久の温泉へゆあみせんと思ひ立」って下向した折の紀行文が『海辺の秋色』である。天明二年八月二十二日に江戸を立ち、東海道を経て大坂まで、大坂からは船で豊後国鶴崎（大分県大分市）まで趣き、阿蘇を経て、十月三日に熊本に下着した。そして、翌年四月一日に始まる帰路の紀行文が『青葉の山路』である。四月一日に熊本を出立し、大宰府を経て下関まで、そこで乗船し大坂へ、そして京都、奈良、伊勢をめぐり、中山道を通って五月二十七日に江戸に辿り着いた。

この三作には陰鬱な描写はなく、経験や心情が平易な文章で書かれる。『やよひの旅』には十八首、『海辺の秋色』には二十三首、『青葉の山路』には四十六首の和歌が収められるが、いずれも手慣れた表現で詠まれている。

軌子に関しては、板坂耀子「清源院軌子の紀行文」（「熊本短大論集」第53号）、前田淑『江戸時代女流文芸史 ― 地方を中心に ―』（笠間書院・一九九八年）が詳しく、『やよひの旅』は板坂耀子「資料翻刻「（江の島詣）」」（「熊本商大論集」第49号）、『海辺の秋色』は同「資料翻刻「海辺秋色」」（「熊本短大論集」第55号）、『青葉の山路』は同「資料翻刻「青葉山路」」（「説林（愛知県立大学）」第27号）に翻刻が収められるものの、底本は永青文庫本ではない。

『やよひの旅』鎌倉入り

『海辺の秋色』末尾



『青葉の山路』冒頭

16 『舟路往還記』（2.5.16.1～2）

時習館第二代教授である藪孤山の長姉妙実が記した紀行文。安永九（一七八〇）年前後の成立か。内容は、妙実が熊本から京都へ往復する紀行文である上巻と、宝華山雲巌禅寺、大梁山大慈寺、住吉神社（宇土市）、松橋、八代など熊本近辺散策の記録である下巻とに分かれる。

上巻冒頭の孤山の序文によれば、まず上巻所収の往路の記が後桜町天皇の叡覧を賜り、「可無還路之記乎（還路の記無かるべきか）」と促された。その後献上した復路の記も同様に賞賛を得たという。下巻の末に付された「綾小路宮内卿よしかた」作とされる跋文には、妙実が「あね君のつぼねにたちより」、それ以後物や手紙をやり取りするようになり、「あね君」を通して後桜町上皇の元へ献上されたという。但し、「綾小路宮内卿よしかた」という人物は記録に見えず、正しくは綾小路俊資か。俊資は一七八七年に宮内卿に任ぜられており、時期的に矛盾しない。また、俊資の実父である庭田重熙には、條子（典侍になり、源中納言と号す）という名の後桜町天皇の女房になった娘がいた（庭田家系譜〈書陵部〉）。いかなる経緯か未詳であるが、妙実は條子と交流を重ね、妙実作になる雅文が後桜町天皇の目に触れることになったのであろう。

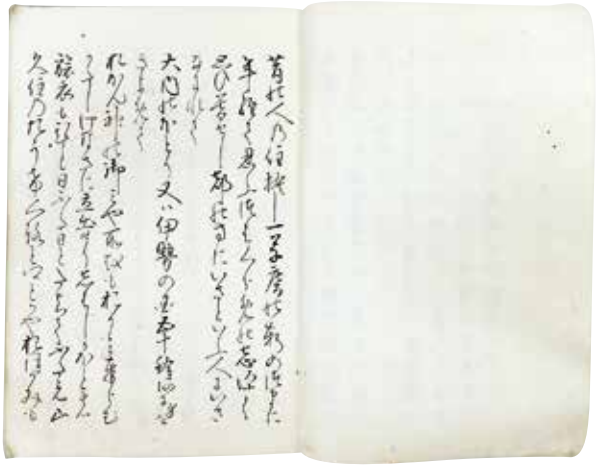
上巻は「藻屑」「松のみどり」の名の異本が報告されている。東京桂の会「「舟路往還記」上」（「江戸期おんな考」第8号）は本書の翻刻、矢野淑子他「資料翻刻・東北大学附属図書館狩野文庫蔵「船路往還記」（一名「藻屑」）上・下」（「ガイア」第5号・第6号）は別本の翻刻であり、荒井澄子「舟路往還記」につ

いて」（「江戸期おんな考」第８号）、板坂耀子「女流紀行「藻屑」について」（「ガイア」第４号）に研究が備わる。

17 『道之記』（仮歌書.8.1）『道之記』（仮歌書.8.2）

天保三（一八三二）年五月一日、熊本藩第十代藩主細川斉護は、「君」（第十一代将軍徳川家斉）の許しを得て熊本へ出立した。江戸から東海道を西へ趣き、大坂から室の津（兵庫県たつの市）まで陸路、そこから船で豊後国鶴崎へ、再び陸路で阿蘇を通って大津、熊本に辿り着いたのは同年六月五日のことであった。その折の斉護の紀行文が『道之記』である。

『道之記』（仮歌書.8.1）、『道之記』（仮歌書.8.2）とも斉護の自筆であるが、『道之記』（仮歌書.8.1）には某人が朱による添削を加えている。例えば、五月三日条には「平塚のむまやもすぎて、花水橋といふにきたりぬるに、杜若の花の咲しを見て」とあるが、『道之記』（仮歌書.8.2）では「平塚の駅もすぎて、花水橋のあたり、杜若のさけるをみて」の本文になっている。斉護が執筆した後、『道之記』（仮歌書.8.1）を某人へ見せ、添削を乞い、それを受けて『道之記』（仮歌書.8.2）を清書したことが明らかである。この添削を行った某人は、斉護の歌道の師であった、熊本の国学者長瀬真幸であろうか。添削される前の本文が、池邊義象・池田末雄編『陽春集』（非売品・一九〇三年）に翻刻されている。



『舟路往還記』上巻冒頭

『舟路往還記』下巻雲巌禅寺

『道之記』（仮歌書.8.1）五月三日条

『道之記』（仮歌書.8.2）五月三日条

MEMO

MEMO

同時開催

公開講演会・第13回永青文庫セミナー

演題 **永青文庫と「旅」**

講師 竹島 一希（熊本大学大学院人文社会科学研究部　准教授）

日時 平成30年11月3日（土）14時～15時30分

会場 熊本大学附属図書館 1階 ラーニングコモンズ

※ 聴講無料〈先着140名まで〉事前申込不要

第34回 熊本大学附属図書館貴重資料展

解説目録

永青文庫本に見る「旅」
－細川幽斎文学書を中心に－

竹島 一希　編著

平成30年11月刊　熊本大学附属図書館

本目録の無断転載・複製を禁ずる